小久保さんのハウスでは、ヒートポンプ（奥）は芽が出始める9月下旬から稼働を始める（愛知県田原市で）

価格変動が大きい重油を使わず、電力で動くため、施設園芸の加温コストの削減・安定化が期待できるヒートポンプ。冷房や除湿ができるのも特徴だ。花きでは夜間冷房で花芽形成が促進され、除湿で花弁の染みが減るなど品質向上につながる。愛知県田原市の小久保礼次さん（57）は、スイートピー栽培で活用。導入前より収量が3、4割増え、秀品率は3割上がった。

ヒートポンプ 冷房・除湿 品質向上

アグリフォーカス

スイートピー 夜間使用、秀品3割増

ヒートポンプによる冷房・除湿の活用は、花きでは菊やバラ、鉢物のシクラメンでも導入事例があり、花色や草姿が良くなるといった効果が確認されている。スイートピーでは秋に夜間冷房を行うと落蕾（らくらい）が軽減されることが分かっているが、活用事例はまだ少ない。

スイートピーをハウス4棟・約23ヘクタールで栽培する小久保さん。品質向上を目的に、2018年に国の事業を活用してヒートポンプを2台入れた。20年と21年にも1台ずつ、国と県の事業を活用して導入。現在はハウス2棟・約14ヘクタールで、計4台を稼働させる。

スイートピーは9月に播種（はしゅ）し、11月中旬から翌年4月下旬まで採花する。期間中、ヒートポンプは常に稼働している状態だ。9月下旬～11月末は冷房として、夜間温度が20度を超えないように使い、循環扇も併用する。12月～翌年2月までは暖房。2～4月は冷房を使って除湿する。春先は、気温が高くて湿気が多いと花弁に染みができ、花色も薄くなってしまうという。

ヒートポンプを導入したハウスでは、収量は導入前より3、4割増加した。落蕾や花染みの発生が減り、秀品率も3割増えたという。小久保さんは「ハウス1棟当たりの収入は年間20万～30万円は変わる」と話し、導入コストは5、6年で回収できるとみている。

通常は秀品がほとんどなくなるという3月末から4月第1週にも、ヒートポンプを導入したハウスでは、秀品を出荷できるようになった。「入学式や卒業式で一番需要のある時期に、良い状態の花を出せる」（小久保さん）。近年の夏の高温への対応にも、ヒートポンプを使った品質維持が不可欠と考える。

小久保さんが所属するJA愛知みなみのスイートピー出荷連合では昨年、3人が新たにヒートポンプを導入した。小久保さんは「部会員に導入が増えれば産地全体の品質向上が期待でき、市場からの一層の信頼獲得につながる」と話す。

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。